

# 海難者供養の民俗学的研究

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科  
博士後期課程 小野寺佑紀

## 要 旨

日本列島の沿岸地域には海難者（水死者）を供養すると幸運・豊漁に恵まれるという伝承が広く分布している。古くから「板子一枚下は地獄」と言われるように、航海技術が発達し、海難防止の施策が行われている現代においても、自然災害や人災（操船の不適切）によって悲惨な海難事故は日々発生している。海難は現実には生じた問題であると同時に、海辺の地域においては世相や時代を表す一つの指標としても捉えられている。本研究は、現代日本の海村に伝承される海難者供養について、歴史民俗学的なアプローチから考察するものである。

本論文は、序章と終章を含めて 8 章からなる。各章については以下の通りである。

### 序章

#### 第 1 章 海難と漁撈習俗：三陸沿岸における海難者の揚収作法を事例として

- 第 1 節 海難者の揚収作法と分布の特徴
- 第 2 節 海難者を祀る家々の伝承
- 第 3 節 津波常習地における海難

#### 第 2 章 海難と漁撈伝承：近世南三陸における漁船の海難を事例として

- 第 1 節 弘化 4 年の海難とカツオ漁
- 第 2 節 天明 4 年の海難とアカウオ漁

#### 第 3 章 海難者供養の成立と展開：宮城県気仙沼地方を事例として

- 第 1 節 海難救護と即自的な海難者供養
- 第 2 節 海難防止運動と海難者慰霊行事の成立
- 第 3 節 海難遺族の救済と遺児の育英

#### 第 4 章 海難者供養と新宗教：利根川河口における立正佼成会の「水難供養」を事例として

- 第 1 節 利根川河口の海難史
- 第 2 節 千葉県銚子市の事例
- 第 3 節 茨城県神栖市波崎町の事例
- 第 4 節 水難供養と漁撈習俗

#### 第 5 章 海難と年中行事：神奈川県三浦半島と三重県志摩地方を事例として

- 第 1 節 神奈川県三浦半島のハマセガキ

## 第2節 三重県志摩市志摩町片田のハマアソビ

### 第6章 海難と魚類供養：三重県熊野灘沿岸における石経の習俗を事例として

#### 第1節 熊野灘における石経の諸相

#### 第2節 志摩・南伊勢沿岸における石経

#### 第3節 東紀州沿岸における石経

#### 第4節 魚類供養としての石経

### 終章

#### 第1節 海難者の範囲と異相

#### 第2節 海難者供養の展開

#### 第3節 海難伝承の民俗

#### 第4節 今後の課題

先ず序章では、民俗学をはじめ文献史学・文化人類学・宗教学などの先行研究を整理しつつ、その問題点について検討を加えながら、本論で用いる「海難」と「供養」の用語について定義した上で、研究の目的と背景について提示した。本論で用いる「海難」とは、いわゆる海難事故（船舶海難・人身海難）に限らず、津波のような自然災害による死者や戦没者（陸海軍属・戦時徴用船）を含むものとした。また、「供養」についても狭義の仏教的行為にとどまらない慰霊や祈願を含む、漁村社会において伝承されてきた民俗信仰のあり方として捉えた。

第1章「海難と漁撈習俗：三陸沿岸における海難者の揚収作法を事例として」では、三陸沿岸における海難者の揚収作法を事例について、津波常習地としての当該地域の特徴をふまえながら考察した。先ず第1節では、海難者（水死体）の揚収作法について（1）発見、（2）問答、（3）揚収という3つの観点から考察し、船上における揚収場所の、①右舷（オモカジ）、②左舷（トリカジ）、③艙（トモ）の3つの地理的分布を提示し、フナダマの禁忌や船体艤装の変化から地域差が発生した要因について考察した。続いて第2節では、海辺の怪異と海難伝承について菅江真澄が採録した近世後期の船幽霊譚を挙げながら、怪異譚が語られる海辺の空間と家々の伝承について考察した。最後の第3節では、海難と津波との関係について、明治29（1896）年の明治三陸津波と平成23（2011）年の東日本大震災における津波犠牲者の揚収作法の事例を比較しながら、その異同について考察した。

第2章「海難と漁撈伝承：近世南三陸における漁船の海難を事例として」では、近世後期に南三陸近海で発生したふたつの集団海難の事例について、文献資料や口碑伝承から可能な限り復元を試みながら、海難の様相と後世への影響について考察した。先ず第1節では弘化4（1847）年6月18日に三陸沿岸を襲った未曾有の大時化によるカツオ漁船の集団海難と一連の豊漁との関連について考察した。また、第2節では天明4（1784）年1月2日に仙台藩領の南三陸近海において発生したと推定されるアカウオ漁船の集団海難の事例について言及しながら、東北地方を襲った天明の大飢饉との関連について考察した。

第3章「海難者供養の成立と展開：宮城県気仙沼地方を事例として」では、宮城県気仙沼地方を事例として、当該地域における海難者供養の成立と展開について考察した。先ず第1節では、気仙沼地方の近世後期から昭和初期における海難者を対象とした施餓鬼の経年的な変容について言及した上で、海難発生後に行われる即時的な供養の習わしとして、気仙沼市唐桑の「ウラバライ」と、気仙沼市大島の「ハマアライ」について比較しながら考察した。続いて第2節では、当該地域の実況の変遷について言及した上で、気仙沼と唐桑の海難慰霊行事の成立過程や、慰霊の対象となる海難者の範囲について考察した。最後の第3節では、海難遺族に焦点を当て、気仙沼地方の海難遺族・遺児をめぐる現況と救済措置や相互扶助について、海難者供養とその当事者である遺族の関係から考察した。

第4章「海難者供養と新宗教：利根川河口における立正佼成会の「水難供養」を事例として」では、海難者供養と新宗教との関わりについて、利根川河口域を調査地とした。本章では立正佼成会銚子教会と鹿島教会波崎南支部で行われている「水難供養」の事例に注目し、河川港特有の歴史的背景や漁業従事者が多い地域性など、海辺に依拠したさまざまな要因を含めながら考察した。先ず第1節では、利根川河口域における近世から現代における海難史の概略と、「千人塚」の由来や海難漁民慰霊塔の建立の経緯について論じた。続いて第2節では、立正佼成会銚子教会の水難供養に注目して、銚子市川口町の千人塚と、銚子市外川の外川法座所における水難供養の事例を比較して考察した。また、第3節では、茨城県神栖市波崎町の立正佼成会鹿島教会波崎南支部における水難供養の事例を考察した。最後に第4節では、前節までの内容を踏まえた上で、水難供養の対象と背景をもとに既存の漁撈習俗と新宗教との関係について考察した。

第5章「海難と年中行事：神奈川県三浦半島と三重県志摩地方を事例として」では、年中行事として毎年定期的におこなわれる海難者供養の習俗について考察した。先ず第1節では、毎年8月のお盆の時季にかけて、神奈川県三浦半島の漁港や浜辺で行われている「ハマセガキ（浜施餓鬼）」について、①相模湾岸、②三浦半島西岸、③三浦半島東岸の三つの地域の事例を挙げながら、地域間の共通性と差異について考察した。さらに戦後に始まった海難慰霊行事との関係についても言及した。続いて第2節では、毎年旧暦6月13日に三重県志摩市志摩町片田で行われる、海で亡くなった海女の冥福を祈る「ハマアソビ（浜遊び）」の神事を取り挙げた。この習俗は、「竜宮井戸」と呼ばれる地先の磯に潜りにいったまま帰って来なかった9人の海女の伝説に由来するもので、海女の年中行事として伝承されている。本節ではその由来や背景を「三蔵寺世代相傳系譜」に求め、近世の漁場争論に端を発した祭祀形態の変容と、後世の漁業権への影響にも言及しながら考察した。

第6章「海難と魚類供養：三重県熊野灘沿岸における石経の習俗を事例として」では、三重県熊野灘沿岸における「石経」の習俗について、海難者供養という視点から歴史民俗的に考察した。先ず第1節では、仏教的な作善行為である「礫石経（一字一石経）」と「石経」の関係について考察しながら、志摩・東紀州の宗教的様相の変遷と類似する民俗行事から、熊野灘沿岸において石経が受容された背景について考察した。続いて第2節では、志摩半

島の事例として、志摩市阿児町志島の「志島の石経おらし」を取り挙げ、予祝儀礼や豊漁祈願との関係から検討した。また、第 3 節では東紀州の事例として、尾鷲市須賀利町の「須賀利の石経」を取り挙げ、海難者供養からみた漁撈習俗と漁場認識との関係について考察した。最後に第 4 節では、石経の習わしが海難者という範囲から、魚類の供養にまで展開している点について考察した。

終章では、各章の内容から海難者の範囲と異相について論じた上で、海難者供養の展開を、(1) 海難救護と即時的な海難者供養、(2) 年中行事としての恒久的な海難者供養、(3) 慰霊行事としての恒久的な海難者供養、という 3 つの段階に類型化して総括した。

また、今後の課題として、日本海側の事例との比較の必要性和、漁民の移動に伴う海難者供養にまつわる習俗の伝播の可能性を示して結びとした。